

書評

小西真理子著

『共依存の倫理——必要とされることを渴望する人々』

(晃洋書房、2017年)

早川正祐

現代社会では、共依存は人間として未熟で不健全な状態（関係性）とされ、是非とも克服すべきものとして否定的に捉えられている。少なくとも、そういった否定的な捉え方が支配的であろう。私もこの本を読む前は、なんとなくそう考えていた。だが、本当にそんな単純な捉え方でいいのかと、本書は大胆に問いかけてくる。「共依存は克服すべき」という捉え方は、わかりやすい反面、とても平板で底の浅い人間観・自己観を前提にしているのだろうか。また、そこで前提されている倫理観に盲点は潜んでいないだろうか。小西はこうした根本的な問いに読者を誘う。ここで強調すべき点は、小西が共依存の回復論の妥当性に疑問を投げかけることで、共依存の回復論に色濃く反映され、現代社会で自明視されているところの人間観・自己観・倫理観に対しても、同時に疑問を投げかけている点である。だからこの本は、共依存の回復論に対する批判的考察にとどまるものでは到底なく、現代社会における私たちの生き方に対する批判的考察にもなっている。そういうわけで、この本の射程はとても広い。小西が詰まるところ必死で抗おうとしているのも、真つ当な装いをまとった強固な社会的通念（の一部）であり、それは、とてつもなく手強い相手であるような気がする。

もう少し丁寧に本書の内容に触れておこう。とりわけ、（共依存の回復論において）克服の対象となる共依存の病理性がどのようなものとして捉えられてきたのか、また病理性の理解が歴史的にどう変遷してきたのかについて、小西は詳しく検討していく。ここで重要な論点は、当初は神経症的な観点から理解されていた共依存の病理性が、時代が進むにつれて「自己喪失の病い」という観点から理解されるようになったという点である。したがって、現在支配的な共依存の回復論も、「自

己喪失という病い」からの回復を目指すものとなる。すなわち、共依存の回復論（以下では単に「回復論」と略することがある）によれば、共依存の人は、自身のことを蔑ろにしてまで相手に過剰に尽くすのであり、その意味で自己を見失っている。そして、そういった自己喪失という不健全なあり方（関係性）を克服し、自律的な主体になるよう成長すべきだとされる。しかし小西によれば、一見して無害かつ尤もらしい、こういった回復論の規範は警戒すべき危うさをはらんでいる。

とはいえ、共依存の回復論の危うさを批判的に考察するといっても、小西は回復論を全面的に退けるような乱暴なことは決してしない。あくまでも回復論がもつ意義を、共依存に苦しみつつも回復していく当事者に対する実際のインタビュー等を通して、最大限に明らかにしたうえで、回復論に対する批判的な検討をしていく。換言すれば、回復論の意義に関する小西の論述の仕方はとても丁寧であり、いわば回復論に対しても十分な敬意が払われている。実際、インタビューにおいて、回復論的な筋立ての語りを展開するAさんに対しても——Aさんの語りは紆余曲折に満ちていてとても豊かである——、小西は共感的であり、ここではAさんに対する小西のあたたかい眼差しが感じられる。

しかしながら、このように共依存の回復論がもつ意義を十分に認めつつも、小西は回復論がはらむ危うさも鋭く指摘する。小西によれば、はたから見れば、どんなに異様で理解しがたいものであっても、本人およびパートナーが、共依存的なあり方（や関係性）に、他人には汲み尽くせない豊かな意味やかけがえのない価値を見いだしている場合が実際にある。にもかかわらず、回復論は、そのような場合であっても、共依存的なあり方を克服すべきものとして否定的に捉えてしまう。というのも回復論によれば、そのような共依存的なあり方は「偽の自己」のあり方であり、目指すべき「真の自己」は、他者との建設的な支え合いを通じて成長し、自らのあり方を律するようになる自律的な自己だからである。このように回復論では、自律的な自己を理想とする倫理観（自己観）が深く根を張っている。そして、こうした倫理観

や自己観が幅を利かせることで、共依存的なあり方に肯定的な意味と価値を見いだす人たちの生き方は、一方的に否認されてしまう。しかし小西によれば、回復を望まない人にとっては、不純なものを排した一枚岩的な真なる自己こそが、実のところ、偽りの自己かもしれない。回復論の妥当性をつゆ疑わずそれにのめり込んでしまうならば、逆に、純粋な真なる自己という語りに大いに嗜癖して服従しているということになる。その点でミイラ取りはミイラになっており、回復論はそれが徹底されれば内から破綻しうる。さらに興味深いことに、小西の議論からは、健全を一途に目指すこと自体の「不健全性」、不健全性や未熟さを許容しないこと自体の「不健全性や未熟さ」という論点も引き出すことができる。

もちろん回復論と一口に言っても、細かく言えば、様々な種類があるだろうし、回復の筋立てで語る本人にとって、それは測り知れない価値があるにちがいない。だから回復論の価値を決して軽く見積もってはならない。この点は、繰り返し思い起こす——小西が実際そうしているように——べきであろう。

しかしながら他方で、「わかりやすさ」「わかりやすい語り」に嗜癖し、理解しがたいものを忌避する現代人にとって、「わかりやすい自己像」を提供してくれる回復論は共有されやすく、だからこそ、小西の言うように、共依存的な関係をあくまでも維持する「わかりにくい人生の形」は不当に隠蔽されてしまう。いつだってそうだが社会的な共有は社会的な排除と表裏一体である。小西によれば、現代社会においては回復論および（回復論に潜む）自律的な倫理観が広く共有されることで、回復論を拒むような共依存的な「わかりにくい生き方」は、異常という烙印を押され、排除される根強い傾向がある。そして小西は、そういった現状に慣れてしまった私たち現代人に、「それでいいのか」と繰り返し問いかけ、その現状に甘んじるべきではないということを力強く示す。こういった点を踏まえると、小西の考察は現代人の生き方を批判的に問うという意味での「反時代的な考察」の側面を少なからずもっている。

いうまでもなく、この本はここでは論じ尽くせ

ないほどの豊かな内容をもっており、この書評で紹介したのは、その一端に過ぎない。その詳細に関しては、是非、本書を手にとって読んで確認してほしい。最後に一言だけ付け加えれば、本書をその根底から支えているのは、はたから見れば異様で理解しがたいものに対する、小西の深い感受性である。理解しがたいものに会ったとき、私たちは、それを異常なものだと決めつけ無自覚的に排除する。その方が楽だし、安心感も得ることができる。しかし、小西は、この排除に対して相当粘り強く抵抗する。常人には容易には真似できない、この粘り強さこそが、本書を可能にしている当のものなのかもしれない。